

奈良県葛城市における
大気汚染による文化財影響調査報告書
2019 年度



(當麻寺西南院と西塔)

2020 年 3 月

奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室

奈良県葛城市における 大気汚染による文化財影響調査報告書 2019年度

1 調査の契機

2004年當麻町と新庄町が合併して葛城市が発足した。葛城市では廃棄物の焼却を両町合併後も當麻クリーンセンターと新庄クリーンセンターで行ってきたが、2施設を統合して処理を行う新クリーンセンター建設を當麻クリーンセンター所在地に計画した。新クリーンセンター予定地の北側には尾根を一つ隔てて當麻寺があり、東塔、西塔、鐘楼などの国宝、中之坊庭園の名勝など国指定の文化財が所在し、クリーンセンターの廃棄物焼却に伴い発生する物質がこれら文化財に影響を与えることが懸念されるところであった。

奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室(代表 西山要一)は葛城市の依頼を受けて、當麻クリーンセンターの稼働中(2011年9月末まで)、同センターの稼働停止・廃炉・新クリーンセンター建設中、および新クリーンセンター(以下クリーンセンターと記す)の稼働開始後の期間の大気汚染の文化財への影響、とりわけ、麻呂子山の尾根を隔てて北側に所在する當麻寺の国宝建造物などの文化財への影響について調査を行うことになった。

本書は、調査9年目(2019年度)のクリーンセンター稼働開始後の大気汚染測定の結果を報告するものである。

2 大気汚染測定地点

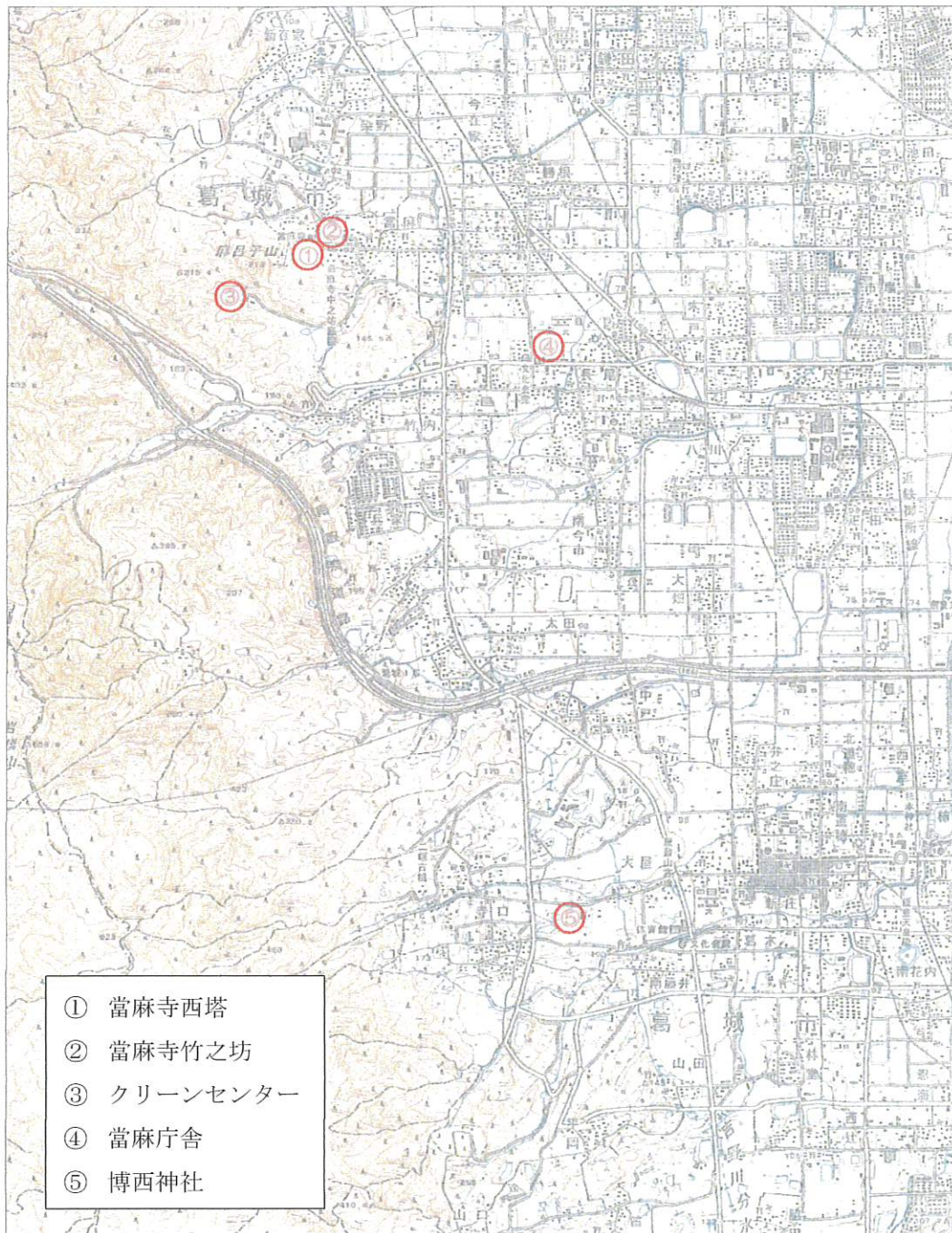
大気汚染の測定地点は、當麻寺西塔(西塔南側・位置図①)、當麻寺竹之坊(②)、クリーンセンター(2017年3月までは當麻クリーンセンターの敷地西側、2017年4月からはクリーンセンターの敷地東側③)、葛城市當麻庁舎(庁舎北側④)、博西神社(本殿北西側⑤)の5か所に設定した(図1 葛城市大気環境測定位置図、図2 葛城市大気環境測定シェルター設置状況)。

當麻クリーンセンター稼働中は同センターを大気汚染の発生源とみなし、また操業停止後は、バックグラウンドのデータを取得するために同センターを始め、當麻寺西塔、當麻寺竹之坊、當麻庁舎、博西神社で継続測定することとし、2017年4月のクリーンセンター稼働開始後も引続き測定を継続した。本報告は3年目のデータであり、2011年3月以前、2011年4月～2017年3月との比較データとして、環境変化の有無を把握する上で極めて重要なものである。

3 大気汚染測定方法

文化財所在地など多地点で継続的に大気汚染測定を行うためにトリエタノールアミン円筒濾紙法 (TEA-CF) を採用し測定点にシェルターを設置した。そして、とりわけ文化財に大きくかつ急激な損傷をもたらす酸性物質である二酸化硫黄 (SO_2)・二酸化窒素 (NO_2)・塩化物イオン (Cl^-) の3種類の濃度を測定した。

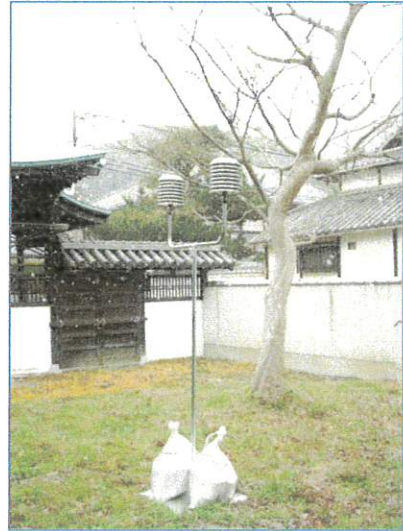
(図1) 葛城市大気環境測定位置図



(図2) 葛城市大気環境測定シェルター設置状況
 (2011年3月設置 2019年度現在も同地点で測定を継続している)



① 當麻寺西塔 (左の建物が西塔)



② 當麻寺竹之坊

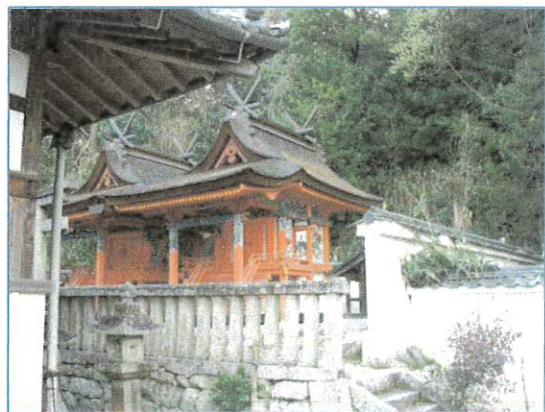


③ クリーンセンター

(2011年4月~2017年3月には當麻
 クリーンセンター敷地西側で、2017
 年4月以降はクリーンセンター敷地
 東側(写真)で観測している。)



④ 當麻庁舎



⑤ 博西神社

大気汚染のサンプリングと分析は下記の通り（１）～（４）の工程で行った。

- （１）表面積 100cm² の円筒形の濾紙にトリエタノールアミンを含浸し、測定地点に設置したステンレス製シェルター（高さ 180cm）に装置し、およそ 1 か月間大気曝露したのち回収する（トリエタノールアミン円筒濾紙法・TEA-CF 法）。
- （２）回収した円筒濾紙から大気汚染物質を抽出し、分析試料とする。
- （３）試料をイオンクロマトグラフィーで分析し、汚染物質の濃度を計測する。
- （４）計測値を温度補正し 1 日当たりの濃度を算出する。二酸化硫黄(SO₂)の濃度は ppb/day、二酸化窒素(NO₂)の濃度は ppb/day、塩化物イオン(Cl⁻)の濃度は μg/100cm²/day で表示する。

4 大気汚染調査の結果

測定の結果を図 3-1～3-3 に、2019 年度大気汚染月変化グラフとして二酸化硫黄、二酸化窒素、塩化物イオンの大気汚染物質ごとに示した。また、あわせ参照として 2018 年度、2017 年度の月変化グラフを添付した。また表 1 に 2019 年度大気汚染日平均値を示すとともに、図 4 には大気汚染の種類ごとに 2011 年度～2019 年度の経年変化グラフもあわせ掲載した。

なお、當麻寺西塔は奈良県文化財修理事務所による修理中の 2017・2018 の 2 年間工事足場（西塔三層目）で計測を行い、その値を 2018 年度月変化グラフに加えた。

當麻クリーンセンターは 2011 年 9 月に稼働を停止し、2017 年 4 月からはクリーンセンターが稼働を開始している。

各測定点の大気汚染濃度の平均値を比較すると、それぞれの地点の周辺環境の特徴が反影されていることがわかる（表 1）。

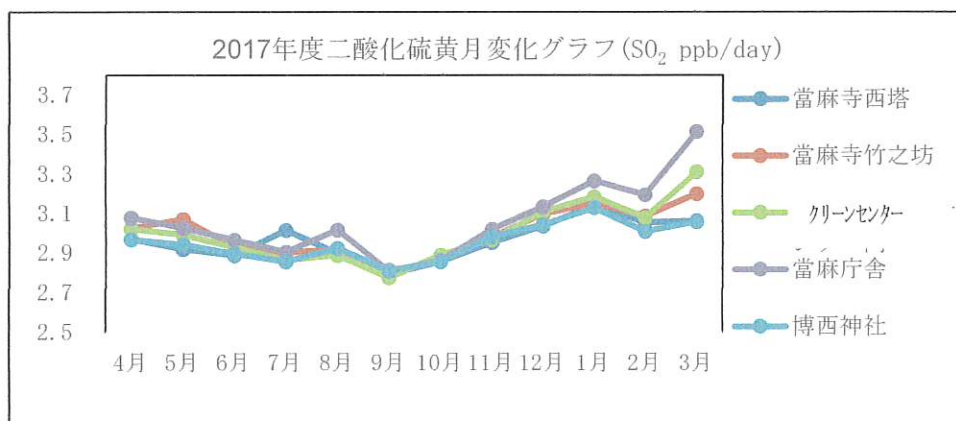
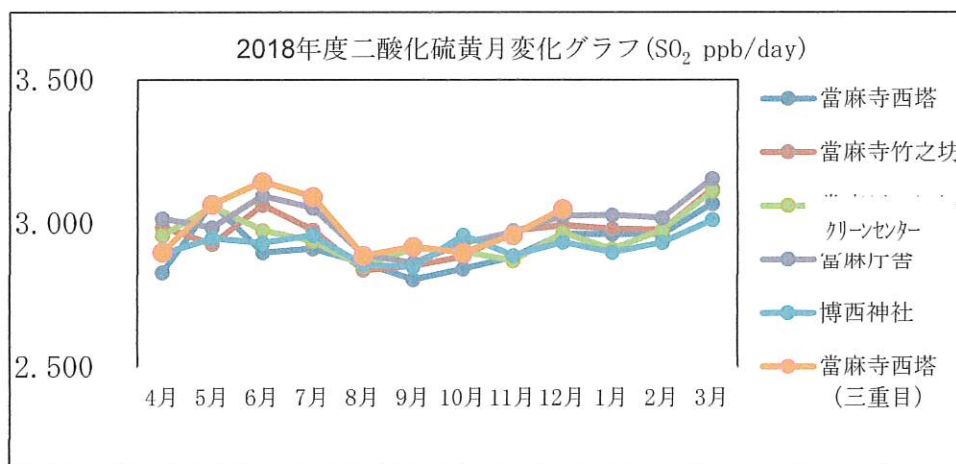
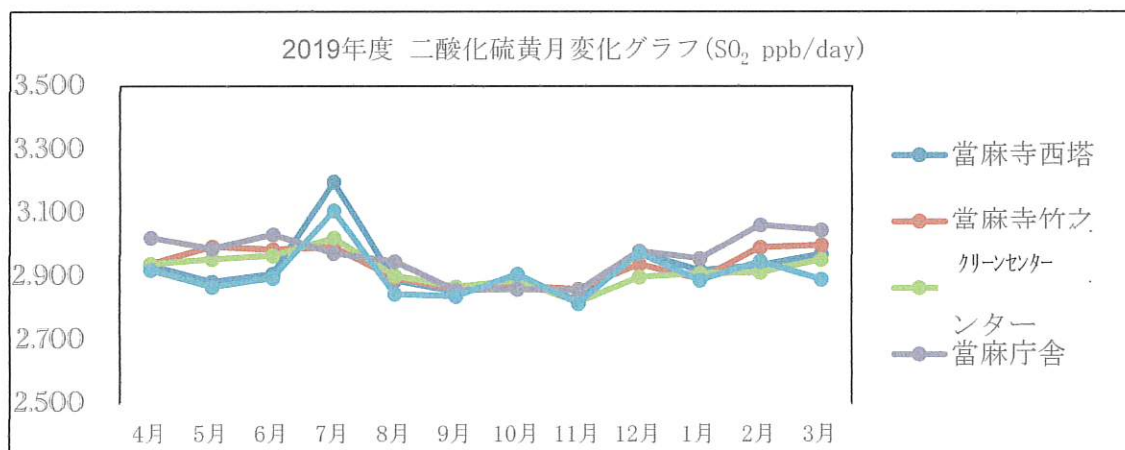
二酸化硫黄(SO₂)は主として石油などの化石燃料の燃焼で発生する。二酸化硫黄濃度は、當麻庁舎が 2.965ppb/day とやや高いのは市街地にあることに起因し、博西神社が 2.908ppb/day と低いのは樹木林に囲まれた清浄な環境であることを反映している。當麻寺西塔が 2.931ppb/day、當麻寺竹之坊が 2.935ppb/day と比較的低いのも當麻寺境内の木々と伽藍建物に囲まれているためである。クリーンセンターが 2.919ppb/day と低い値であることは焼却場における硫黄酸化物除去装置の効果であろう。いずれの測定地点も 2.908～2.965ppb/day と奈良公園の文化財所在地（表 2）と比較しても低い値である。

二酸化窒素(NO₂)は主として自動車の排気ガスに含まれる。測定地点によって明らかな差がみられる。當麻庁舎は 6.569ppb/day とやや高いのは市街地で自動車通行量の多い道路と駐車場に面しているためである。博西神社は 5.453ppb/day と低く森林に囲まれた清浄環境にあることを示している。當麻寺

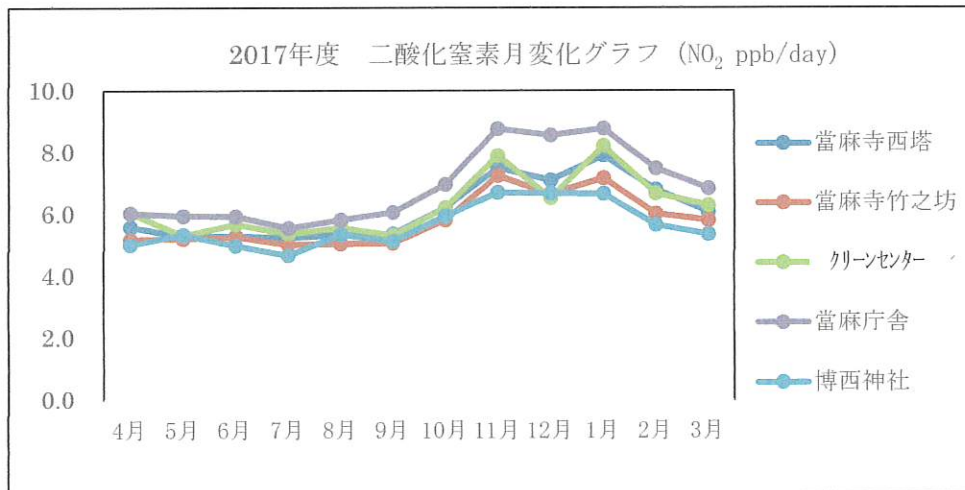
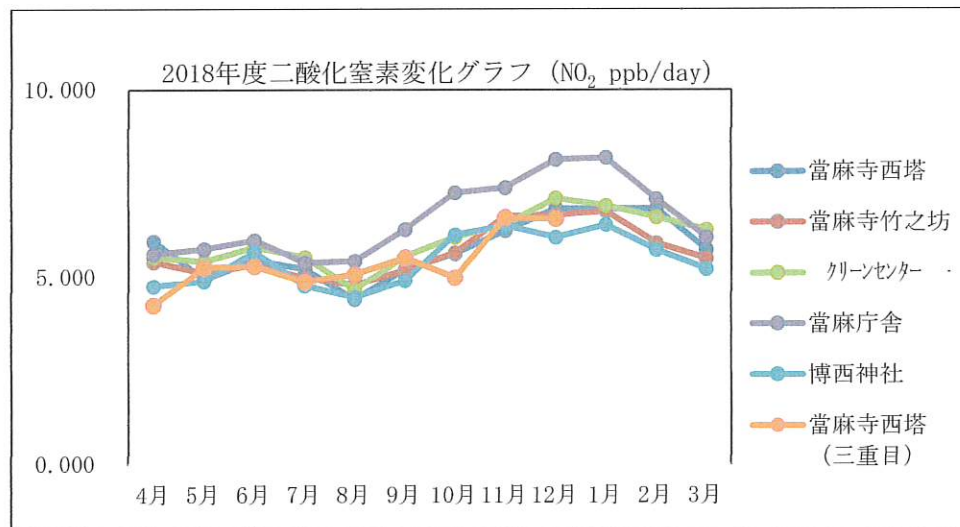
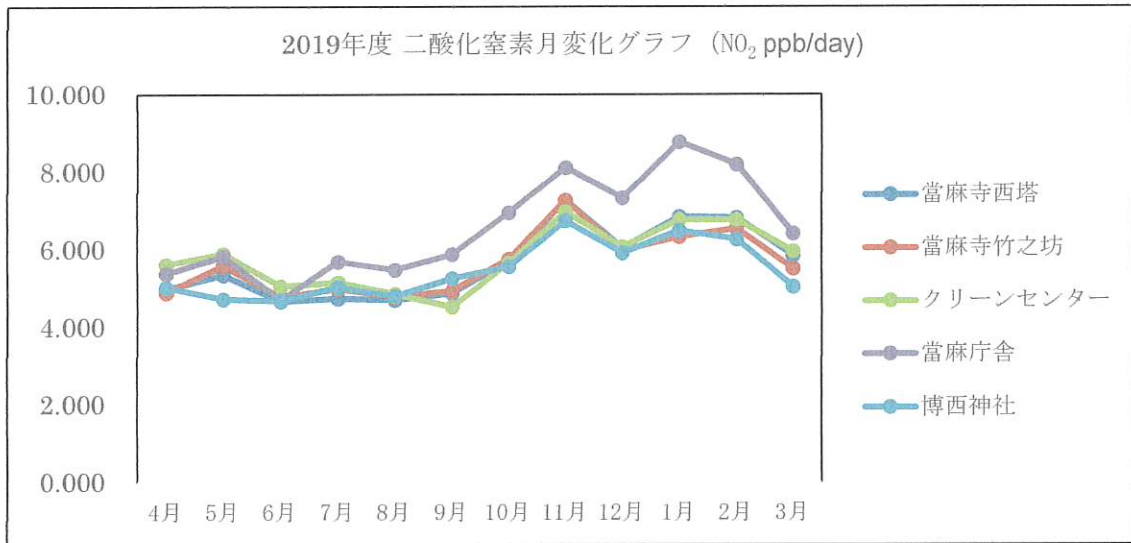
西塔が 5.645ppb/day、當麻寺竹之坊が 5.604ppb/day で山林と広い境内に囲まれ自動車通行もわずかで、博西神社と同等に低い。クリーンセンターは 5.768ppb/day と比較的低いのは焼却装置の窒素酸化物除去装置の効果であろう。いずれの測定点も 5.453～6.569 ppb/day で奈良公園地区(表 2)と比較しても同様に低い値である。

(図3 - 1) 2019年度 二酸化硫黄月変化グラフ

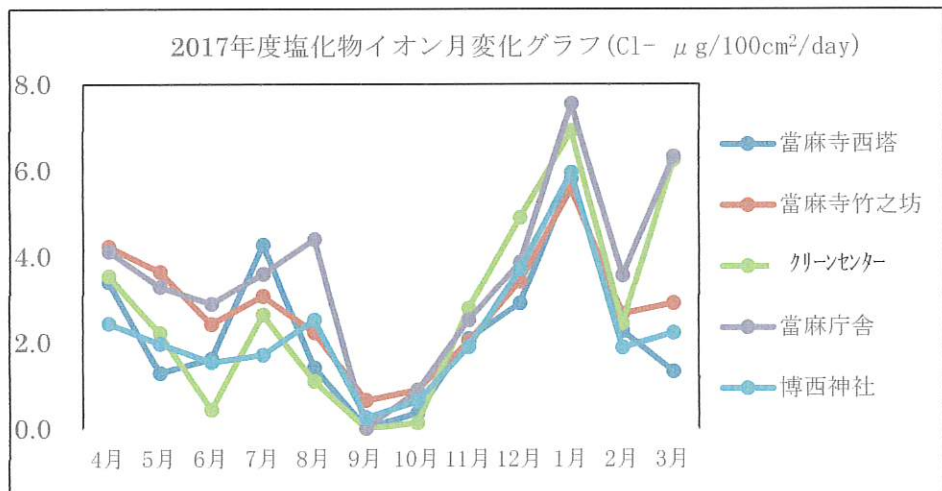
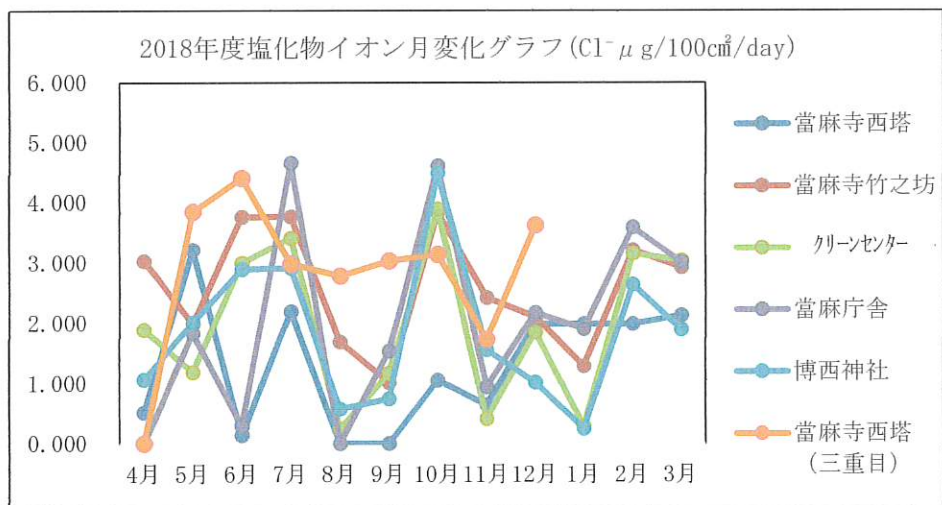
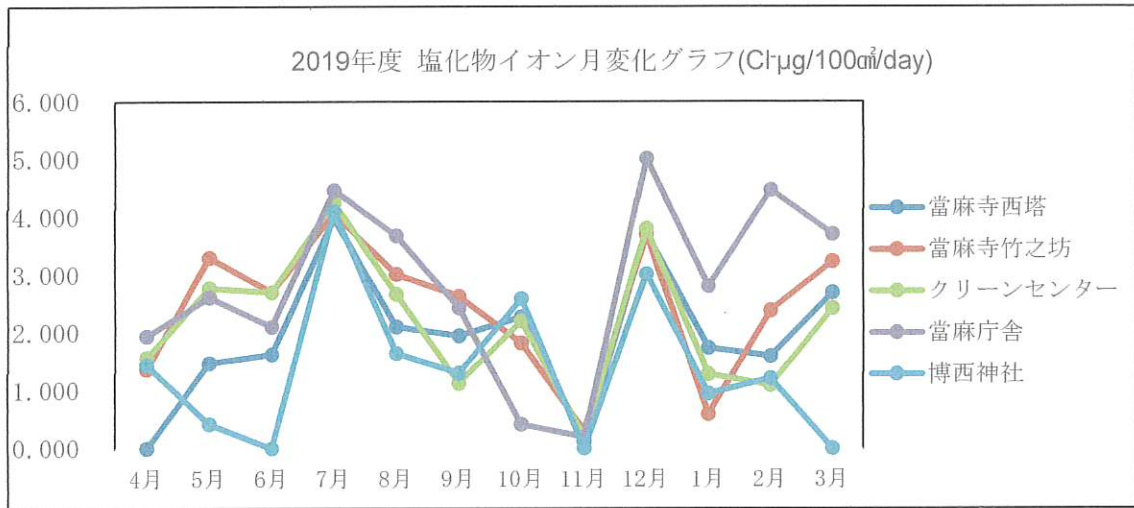
(2018年度・2017年度データを添付)



(図3-2) 2019年度 二酸化窒素月変化グラフ
(2018年度・2017年度データを添付)



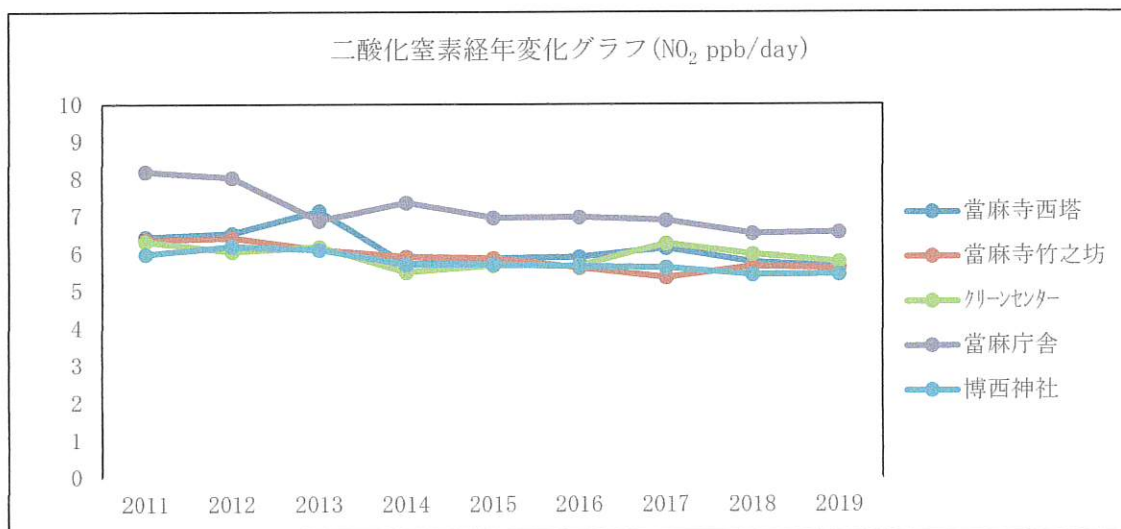
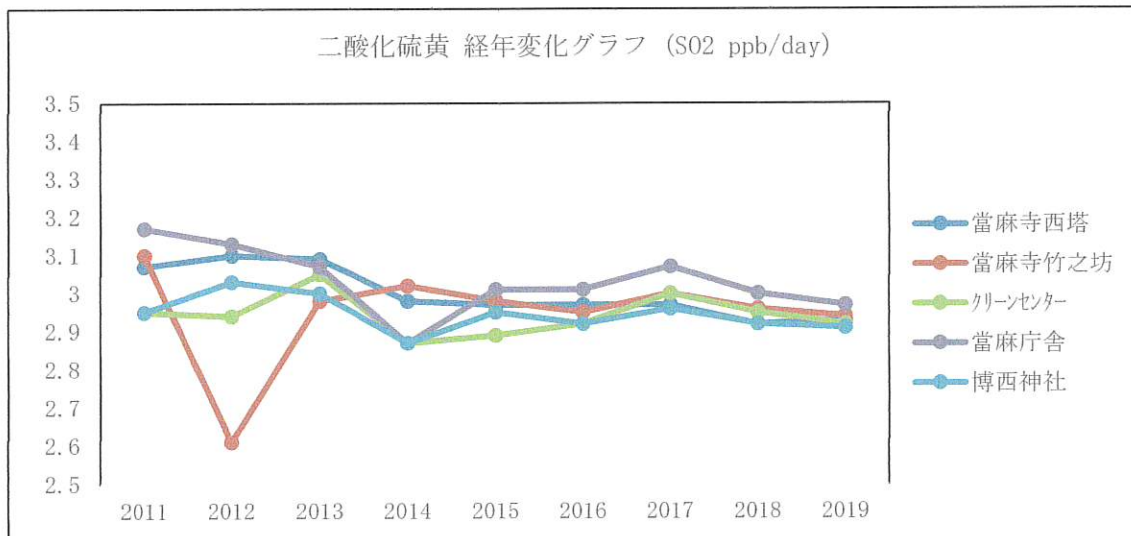
(図3-3) 2019年度 塩化物イオン月変化グラフ
(2018年度・2017年度データを添付)

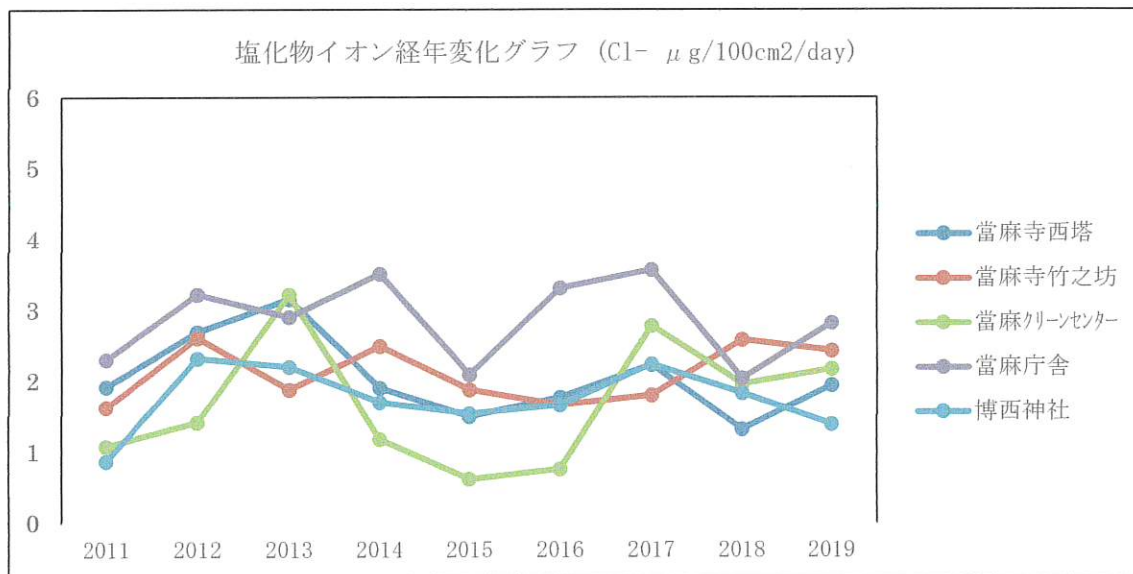


(表1) 2019年度 大気汚染日平均値
(2011~2019年度経年変化グラフを添付)

測定地点	二酸化硫黄 (SO ₂) ppb/day	二酸化窒素 (NO ₂) ppb/day	塩化物イオン (Cl ⁻) μg/100cm ² /day
① 當麻寺西塔	2.931	5.645	1.941
② 當麻寺竹之坊	2.935	5.604	2.427
③ クリーンセンター	2.919	5.768	2.174
④ 當麻庁舎	2.965	6.569	2.819
⑤ 博西神社	2.908	5.453	1.388

図4 大気汚染の2011~2019年度の経年変化





塩化物イオンは主としてプラスチックごみ焼却により発生する。市街地の当麻庁舎で $2.819 \mu\text{g}/100\text{cm}^2/\text{day}$ と市街地でありやや高い。博西神社が $1.388 \mu\text{g}/100\text{cm}^2/\text{day}$ で木々に囲まれた清浄な地であることを示している。当麻寺西塔が $1.941 \mu\text{g}/100\text{cm}^2/\text{day}$ 、当麻寺竹之坊はやや高い $2.427 \mu\text{g}/100\text{cm}^2/\text{day}$ である。クリーンセンターは $2.174 \mu\text{g}/100\text{cm}^2/\text{day}$ で当麻庁舎に近い値である。

いずれの大気汚染データも、当麻庁舎のような市街地は高く、博西神社のように森林に囲まれた地点は濃度が低い。クリーンセンターは2011年9月に操業を停止し、博西神社と同程度に大気汚染濃度は低くなったが、2017年4月のクリーンセンター稼働後はやや上昇しているものの、その後はやや下降している。

各測定点の大気汚染濃度の月変化は季節による特徴が表れている。二酸化硫黄と塩化物イオンは夏期と冬期に高くなり、二酸化窒素は冬期が高く夏期が低くなる傾向にある。日本では一般的現象として全国で見られる季節変動である。

当麻クリーンセンター稼働中の2011年度と稼働停止後の2012～2016年度、そしてクリーンセンターの稼働後の2017～2019年度の大気汚染別比較を表2-1、2-2、2-3に示した。二酸化硫黄・二酸化窒素・塩化物イオンの各濃度は、稼働中のクリーンセンターが他の観測点に比べて必ずしも大幅に高いものではなく、当麻庁舎も同様である。

しかし、これらを見ると2017年4月の稼働後はそれぞれ地点でやや濃度の上昇が見られたが、2018年度以降はやや低下し、平衡状態にあると言える。

表2-1 二酸化硫黄(SO₂)の年度比較(各年度の平均値 単位: ppb/day)

測定地点/年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
① 當麻寺西塔	3.07	3.10	3.09	2.98	2.97	2.97	2.97	2.92	2.93
② 當麻寺竹之坊	3.10	2.61	2.98	3.02	2.98	2.95	3.00	2.96	2.94
③ クリーンセンター	2.95	2.94	3.05	2.87	2.89	2.92	3.00	2.95	2.92
④ 當麻庁舎	3.17	3.13	3.07	3.12	3.01	3.01	3.07	3.00	2.97
⑤ 博西神社	2.95	3.03	3.00	2.94	2.95	2.92	2.96	2.92	2.91

表2-2 二酸化窒素(NO₂)の年度比較(各年度の平均値 単位: ppb/day)

測定地点/年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
① 當麻寺西塔	6.44	6.54	7.14	5.70	5.87	5.90	6.14	5.76	5.65
② 當麻寺竹之坊	6.36	6.42	6.10	5.91	5.87	5.62	5.36	5.65	5.60
③ クリーンセンター	6.32	6.05	6.18	5.50	5.68	5.67	6.26	5.98	5.77
④ 當麻庁舎	8.19	8.03	6.88	7.36	6.96	6.97	6.89	6.54	6.57
⑤ 博西神社	5.98	6.19	6.10	5.70	5.70	5.65	5.62	5.43	5.45

表2-3 塩化物イオン(Cl⁻)の年度比較(各年度の平均値 単位: μg/100cm²/day)

測定地点/年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
① 當麻寺西塔	1.92	2.69	3.16	1.90	1.50	1.77	2.23	1.32	1.94
② 當麻寺竹之坊	1.63	2.61	1.88	2.49	1.88	1.66	2.80	2.58	2.43
③ クリーンセンター	1.08	1.42	3.22	1.18	0.62	0.76	2.78	1.96	2.17
④ 當麻庁舎	2.30	3.22	2.90	3.51	2.09	3.31	3.57	2.04	2.82
⑤ 博西神社	0.87	2.34	2.20	1.70	1.54	1.66	2.24	1.83	1.39

5 クリーンセンターの焼却排気と當麻寺の文化財の環境

さて、當麻クリーンセンターにおける二酸化硫黄、二酸化窒素、塩化物イオンのいずれの測定値も稼働を停止し、新クリーンセンター建設中の2012～2016年度は清浄地の博西神社や當麻寺と同等であった。周囲を山林に囲まれて大気汚染浄化作用も合わせ良好な環境となっている。

そして、2017年4月からの新クリーンセンター稼働後の二酸化硫黄、二酸化窒素、塩化物イオンともに測定値に大きな変化は見られない。

それら葛城市の値は、世界遺産「古都奈良の文化財」に登録されている社寺等の測定値(表3 奈良市所在文化財等における大気測定結果 2010年度平均値)と比較すると、葛城市の二酸化硫黄の濃度は、奈良の諸社社の濃度にほぼ等しく、二酸化窒素は奈良の諸社社の濃度をおおむね下回っている。さらに塩化物イオ

ンは、奈良の諸社寺のうちの東大寺、唐招提寺の値にほぼ等しいものの、興福寺、春日大社、元興寺よりもやや上回っている。

このように奈良の諸社寺の値におおむね等しいか、やや低いことから、葛城市の文化財の劣化が急速に進行することはないと思われる。

しかしながら、2017年の修理以の當麻寺西塔の基壇化粧石の損傷や塔頂部の金銅製相輪のうす緑色の錆は酸性雨や酸性大気など長期の大気汚染の影響によるものであり、緩やかではあるが劣化が進んでいるものとみられる。これは近隣から飛来する越境汚染などの広範囲かつ長期の環境悪化の影響と考えるのが合理的であろう。

葛城市の大気汚染濃度は、奈良の諸社寺と同程度であるものの、當麻クリーンセンター稼働停止の2016年度と比較するとクリーンセンター稼働後の2017年度には汚染濃度はやや上昇し、2018年度はおおむね大きな変化は観られないものの、大気汚染の現況把握やクリーンセンター焼却炉の汚染除去装置のメンテナンス等の管理の徹底が望まれる。今後も継続して観測を行なう必要がある。

(表3) 奈良所在文化財等における大気測定結果 2010年度平均値
(2010年1月～12月 トリエタノールアミン円筒濾紙法)

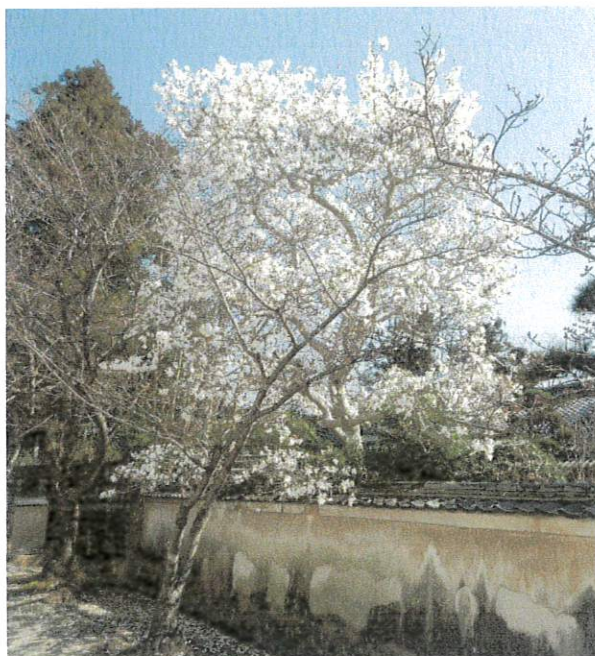
観測地点	二酸化硫黄(SO ₂) ppb/day	二酸化窒素(NO ₂) ppb/day	塩化物イオン(Cl ⁻) μg/100cm ² /day
東大寺	3.00	7.94	2.67
興福寺	2.91	9.32	1.57
春日大社	2.90	6.83	1.67
元興寺	3.01	8.92	1.74
平城宮跡	3.17	10.00	4.21
唐招提寺	2.91	8.08	3.05
薬師寺	3.18	9.74	5.01
円成寺	2.90	5.48	1.27

6 あとがき

本調査は2019年度の1年間の環境測定の報告である。今後も、當麻新クリーンセンター稼働下で調査を継続することにより、葛城市の文化財環境、なかんずく、當麻寺の大気環境・文化財保存環境を把握できるものとする。そして、奈良県下の文化財は隣接する大阪など、さらにはより広い東アジア、そして地球全体を覆う大気汚染の影響を受けざるを得ないのが現状でもある。その事実は、葛城市でも當麻寺の東塔・西塔の先端を飾る金銅製相輪の錆や基壇の化粧石の急激な劣化・損傷に見ることができる。その他奈良では東大寺金堂正面の金銅八角

灯籠や興福寺南円堂の屋根頂部の金銅擬宝珠、大野寺磨崖仏、海外では韓国や中国の石仏、イタリアやギリシャの石造建造物の損傷などを目の当たりにすると、今や地球上のすべての文化財が大気汚染によって日々損傷が進んでいることを認めざるを得ない。文化財保存のための適正な国際的基準の策定が急がれる。

本調査は、奈良大学名誉教授・西山要一がトリエタノールアミン円筒濾紙の設置・回収と本報告の執筆を行い、奈良大学文学部文化財学科卒業生・井上富美子と文化財学科四回生・矢内里奈が円筒濾紙の作製、分析およびデータの解析を担当した。



(當麻寺境内の白木蓮)